
ブックシェルフ

ウォーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブックシエルフ

【Nコード】

N0642L

【作者名】

ウオーズ

【あらすじ】

幾多の文字は形成される。

幾多の文字は創造される、

幾多の文字は融合される。

気晴らしの短編集です。

もしよろしかったら呼んでください。

渴望

少女 少女

欲しいものなにぞ

老父 老父

曲がったスプーン

少女 少女

欲しいものなにぞ

老父 老父

砕けたコップ

少女 少女

欲しいものなにぞ

老父 老父

へこんだ食器

少女 少女

欲しいものなにぞ

老父 老父

みずみずみず

少女 少女

欲しいものなにぞ

倒れた少女

目覚めることなく

渴望の渦に飲まれておちる

それでも老父まだ問い続け

数は百になりそうな

少女 少女

欲しいものなにぞ

老父 老父
新たな犠牲者

渴望（後書き）

欲求があつたとき書いた…気がする…

書いたのは中学二年生の時

やべえ…中二病ビンビンだ

せんべいみたいなら半紙

せんべいみたいなら半紙

曲げればぱりぱり音がする

せんべいみたいなら半紙

色もしょうゆじみている

せんべいみたいなら半紙

なめてみたけどなぜかしょっぱい

せんべいみたいなら半紙

ぼくの押入れに入ってた

せんべいみたいなら半紙

たんすの奥に挟まってた

せんべいみたいなら半紙

ベットの下に丸まってた

せんべいみたいなら半紙

手の練習がしてあつた

せんべいみたいなら半紙

足の練習がしてあつた

せんべいみたいなら半紙

胴体の練習がしてあつた

せんべいみたいなら半紙

全部で11枚見つかった

せんべいみたいなら半紙

重ねてみたら人になつた

せんべいみたいなら半紙

どこかで見た姿があつた

せんべいみたいなら半紙

不愉快な気がして丸めて捨てた

せんべいみたいなら半紙

すぐにコンビニのゴミ箱に捨てた

せんべいみたいなら半紙

ぱりぱりと破いて風に流した

せんべいみたいなら半紙

一枚だけまだ残ってた

せんべいみたいなら半紙

かすれた文字が書いてあった

せんべいみたいなら半紙

けれど「は気がつかなかった

せんべいみたいなら半紙

「明日をもう信じない」

せんべいみたいなら半紙（後書き）

いじめられた（？）時に書いた詩。

紙をなくしてしまったから

思い出しながら書いた

中性石鹼

たべたたべた

おいしかった

ごちそうさま

誰もいないのにそういつて

僕は食器を持っていった

お気に入りの中性石鹼

特に有名ではないけれど

僕は大好きこの石鹼

泡が立つのは遅いけど

僕は大好きこの石鹼

量もとっても少ないけど

僕は大好きこの石鹼

色はちょっとにごってるけど

僕は大好きこの石鹼

自分のことしか考えないけど

僕は大好きこの石鹼

友達とケンカしたけど

僕は大好きこの石鹼

女の子に振られたけど

僕は大好きこの石鹼

テストも大失敗したけれど

僕は大好きこの石鹼

石鹼石鹼 大好きさ

使い切ったらさようなら

こんな風になりたいな

中性石鹼（後書き）

10ぷんでいまのしんきょうをあらわした詩だそうです。

さんだいはなしっ！「イヤホン」「つめきり」「ボールペン」(前書き)

バトンで回ってきたやつです。

文学 女のリスペクト(?)系バトン。

お題はタイトルどおり、「イヤホン」

「つめきり」「ボールペン」でした。

さんだいはなしっ！「イヤホン」「つめきり」「ボールペン」

朝、目が覚めた。

ベッドの上に乱雑に置かれたイヤホン。

昨日は夜遅くまで曲を聴いていたから。

身支度を整え、学校に行く。

絡まりあったイヤホンを音楽プレイヤーにつなげ、

ポケットに入れた。

マンションの階段をおりていると隣の部屋の男子が来た。

「おはよう。」

イヤホンの上からも聞こえるような声だった。

「おはよう…」

私は少し声のトーンを下げた。

最近こいつとはよく会う。

いや、向こうがこっちの時間を合わしているのだろうか？

それとも…

試行錯誤を繰り返す内、どうしてもよくなり私は音楽に没頭した。

BGMのBGMとして私は彼の声を聴いていた。

彼の表情は生き生きとしていた。

だが私は目もくれなかった。というより目をそらしていた。

学校の帰り道も私は彼に会った。

私はまた行きと同様にイヤホンで音楽を聴いた。

彼の表情は今度は少し曇っていた。

意気揚々と話す彼の話をまるで聞かずに

ただうなずきを返すだけ。

相手は勘違いしているのかもしれないけど語勢が強くなっていた。

私はまたいつものように階段をのぼり、そこで別れた。

すると彼はまたイヤホンの上から聞こえる声で聞いてきた。

「明日、俺、転校するんだ。」

一瞬、私の中で何かがはじけた。

「…そう…」

私は素っ気のない返事を返した。

その日の夜。私は爪切りをした。

チキ、チキ、チキという音が心地よく感じる。

何回か手はぶれてしまっていた。

正直になれない。

私は自己嫌悪にかられると爪を切る。

本当にこのままでいいのだろうか。

彼は私に何を思っているのだろうか。

私は彼に何を思っているのだろうか。

何が私と彼を思わせているのだろうか。

私は自己嫌悪にかられると爪を切る。

ならば、今、自分を受け止めてやろう。

私はボールペンを手に取り、殴り書きをした。

長ったらしい文章。文法完全無視の段落。

そんなものを書いたところでどうなる？

私は今書いた紙をびりびりに破った。

二枚目の紙に大きめに文字を書いた。

そして夜、部屋を飛び出し、隣の彼の部屋のポストに入れた。

明日が来るのが怖かった。

朝、目が覚めた。

ベッドの上に乱雑に置かれたイヤホン。

昨日は夜遅くまで曲を聴いていたから。

身支度を整え、学校に行く。

絡まりあったイヤホンを音楽プレイヤーにつなげ、

ポケットに入れた。

マンションの階段をおりていると隣の部屋の男子が来た。

「おはよう。」

イヤホンの上からも聞こえるような声だった。同じ声で私も返した。そしてさらに同じタイミングで言った。

二人とも軽くふきだして笑った。

彼の最後の最高の思い出になって欲しいな。

私はそう思いながらイヤホンをはずした。

さんだいはなしっ！」「イヤホン」「つめきり」「ボールペン」(後書き)

俺の話のコンセプト

前半はふざけにふざけ

後半はきっちりしめる。

僕ドラ。もきつと悲しいエンディングになるでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0642/>

ブックシェルフ

2010年11月15日09時12分発行